

世耕弘一先生の実名入り小説

「学生俣夫」の世界とその背景についての実証的考察

近畿大学名誉教授 建学史料室研究員 荒木 康彦

1

世耕弘一先生の実名入りの小説である穂積驚作「学生俣夫」が、昭和十四年四月一日刊行の雑誌『キング』（第十五巻第四号）¹に掲載されたことは、周知の通りであり、『キング』の同號の当該部分は不倒館で常時展示されている。だが、本作品の内容とその当時の歴史的現実という背景とを摺合せ、学術上の問題として、従来、実証的に考察されたことはなかった。そこで、本作品が飽迄も「小

説」であることを勘案しつつ、近代歴史学の理論の精髓とも言うべき Quellkritik（史料批判）の方法を援用して、これについて厳密に考察するのが、本稿の目的である。

そこで、先ず本作品の作者である穂積驚について、簡単に言及しておかねばならないであろう。

作者の穂積驚の略歴についてであるが、彼の実子（森直樹）によって彼の没後に出版された、穂積驚『長谷川伸・その人』（昭和五十六年）²

の奥付にある「著者略歴」は、次の通りである。

穂積驚

大正元年10月13日、長崎県佐世保市に生れる。本名は森 健二。

昭和7年、上京、梅沢 昇一座に入り、長谷川 伸先生に師事。11年 雑誌『キング』に股旅小説を発表、作家生活に入る。

19年応召。31年『勝島』にて第36回直木賞受賞。

55年1月19日永眠。享年67才。

そこで、昭和十一年刊行の『キング』第十二巻を精査したところ、所謂「股旅小説」の左の三作品が掲載されているのを見出すことが出来た。

- (一)「下駄つ八仁義」(同巻第六號)³
- (二)「血達磨往来」(同巻第十一號)⁴
- (三)「丁の目陣太郎」(同巻臨時増刊第十三號)⁵

また、『一九九二年版 芥川・直木賞―受賞者総覧―』所収の「穂積驚」に関する部分を閲覧すると、右

掲と大略同様の「経歴」が確認出来るだけではなくて、(一)の作品が「好評を博し、それが出世作となり、以後作家生活に入った」事が分る。

従って、「学生俣夫」は穂積驚の初期の作品であるが、彼が当時発表していたジャンルの「股旅小説」ではなくて、同時代を題材とした小説であった事が刮目に値する点である。

世耕弘一先生と穂積驚の関係性を直接的に示す史料は、従来、発見されていない。だが、先生は日本大学在学中に「日本座」と称する演劇倶楽部の如きものを結成して活動されていた位⁷に、演劇に造詣が深かった事を勘案するならば、「梅沢昇一座の座付作家」⁸であった穂積驚との接点もそうした所に有るかも知れず、この点に関する考究は今後の課題にしたい。

「ガリ／＼屋」と綽名される「車宿の親方」は、「俣夫」の一人である「弘一」が非常に勤勉に働いているだけではなくて、自分では三日三晩かかった「月末の勘定」を二、三時間で自発的に片付けて呉れるのに感謝し、昼は、「神田の正則中学校」(ママ)に通って夜は「夜學」に通い、夜中は「俣夫」をしている「苦学生」であることに感心し、「駒込」の「岩

2

小島操畫の挿絵三葉入りで、「名家の令嬢をのせて梶棒を握る若い学生俣夫、今は大學教授で評判代議士。」というテーマが附せられた本作品は五段に分かれた、「頑固親爺の情」・「過失」・「金一封」・「鞭」・「榮譽」と夫々に表題が附けられている。

「頑固親爺の情」の段のストーリーは次の通りである。⁹「俣夫達」か

は次の通りである。⁹「俣夫達」か



世耕弘一先生の建学の精神の象徴として、人力車（平成二十一年八月詠）が近畿大学不倒館に展示されている。また、穂積驚作「学生俣夫」が掲載された『キング』（第十五巻第四號）も不倒館には同じく常時展示されている。

崎様の別荘」の「九段の精華女学校」に通学する「お嬢様」を送迎するだけで一円五十銭になる仕事を「弘一」に廻す事を提案し、「大學に入る試験勉強」中の「弘一」はそれを引き受ける。

「過失」の段のストーリーは次の通りである¹⁰。翌朝、嬉しい限りの「弘一」は令嬢を乗せた車を猛スピードで女学校に送った後に「神田正則英語学校」に向かい、午後二時に令嬢を駒込の邸に送り込んだ後に「神田の夜學」に取って返した。それを済まして、希望に溢れた弘一が車宿に戻ると、「頑固親爺」から一喝された。その理由は、「弘一」の引く車の猛スピードに令嬢が恐怖を覚え、執事からこの親方が叱責されたからである。この仕事を失いたくない「弘一」は必死に執成しを懇願し、親方は岩崎邸に詫びを入れて呉れた。

「金一封」の段のストーリーは次の通りである¹¹。以後は留意するといふ条件で許され、無事に幾月かが過ぎ、この間、「弘一」は「日本大學の試験の勉強を始めて」おり、「数科目を暗記するために」一心不乱に勉強していた。そのような時期の或る日に、「弘一」は暗記しかけていた本に氣を取られて道を間違えて、この令嬢を遅刻させてしまう。その二、三日後の仕事帰りに呼び留められた「弘一」は叱責等を覚悟したが、案に相違して、出入りの警官から弘一の勤勉さを聞かされて感心

した「奥様」からの「本代の足し」という趣旨の金一封を、執事が差し出した。だが、「弘一」は「自主獨立の意志で生きて来」たので、「この意志だけは最後まで貫き徹したい」と述べ、受け取りを固辞した。

「鞭」の段のストーリーは次の通りである¹²。「下宿」への道すがら、「弘一」は「自分で自分の氣持をひそかに愛し」み、「苦學生根性」を出して「あの金」を貰って「苦學しても何んにも」ならず、「苦學の意義をなさない」と思ふのであった。「何んとなる迄は」と心中に誓って「まる七年」文通を断っている肉親を思いつつ、従来の「苦勞の思ひ出」に耽る。「十四の歳から八年間、故郷の紀州で材木問屋の小僧として辛抱したが、向学心は断ち切れず、大學を卒業しようと材木問屋で働いた七年間の貯へを懐中にして」大連に渡ったのが「二十二の歳」であり、「支那」で商売して學資を得ようとしたが、夢破れて金も使い果たし、大連・旅順・朝鮮を巡り、その間に「田舎芝居の太夫元」・「洋傘直し」・「だるま屋の帳場」・「おでん酒屋」・「仙人まがひの気合術師」・「自由労働者」を経験し「さうして四年前に東京に出て来て、今は俸夫」である。だが、この間に「弘一」が忘れなかった唯一のものは「郷關を出る時の初一念」であった。「これからは戦ひ、なほ闘ひつゞけて、いつかは勝つ。いつかは必らず世の中に勝つ。」として、「弘一」は、胸の

中で火と燃えてゐる信念に吾と吾が手の鞭を鳴らした¹³。

「榮譽」の段のストーリーは次の通りである¹³。「弘一」は大學の試験も一年半で殆ど及第し、残り七、八科目という時期に可成りの貯えも出来たので、「根津に、獨立で車宿を開業した」。そして、「弘一」の努力は報われ、学生として最大で最も「晴れがましい榮譽」とも言うべき「卒業と共に『向ふ三ヶ年獨逸國に於て政治經濟學の研究の爲留學を命ず』という辞令を交付された。友人知人に見送られて留學の途に就いた「弘一」は、大阪の次兄宅で関東大震災の報に接した。不安を抱きつつ乗り込んだ「伏見丸」が下関に

3

本作品で最初に、史料批判の俎上に載せなければならない問題は、駒込の「別荘」から「九段の精華女学校」に通学する「岩崎様」の「お嬢様」であり、そして、この人物のモデルは有るのか、という事である。後述するように、駒込に「別荘」を持つ「岩崎様」とは、同地の「六義園」を別宅とする当時の「三菱合資会社」の岩崎家に他ならない。世耕弘一先生が旧満洲（現中国東北部）から帰国されて東京に戻られた時は、一次史料に依って確定する事は現在のところ出来ないが、早ければ大正五年、遅くとも同六年であると考えられている。先生が日本大學を卒業されたのは大正十二年三月である事

着いた時に東京に電話したが不通で、上海に上陸した「弘一」が接したのは「東京横濱全滅といふ凶報」であった。「恩師・山岡萬之助先生」や「友人知己先輩の安否を訪ね」に帰国すべきか、されど「留學の使命もまた重い」と苦悩する「弘一」を乗せた伏見丸は香港に向かった。懊悩の果、「弘一」は「自分に與へられた使命は、東京に引き返すことなく、留學を完うするにある」と、「決然として心に決めた」。

そして、本作品末尾には「現在日本大學の教授として、又政友會の花形代議士として、令名高い世耕弘一氏の半生は、このやうに血と涙の結晶であつた」と附記されている¹⁴。

は確定出来ている。それ故に、先生が「學生俸夫」として活動された期間は、最大限に考えて大正五年位から同十二年三月位と見做して大過あるまい。それ故に、岩崎家の子女で、当該期間に「九段の精華女学校」に在籍した人物が有るか、という事になる。

その前に、この「お嬢様」が通う「九段の精華女学校」について、解明しておかねばならないであろう。『官報』第八千二百六十九號（明治四十四年一月十七日）¹⁵に、「九段の精華女学校」を指すと思しき学校の設置・認可が、次の如く「告示」されている。

文部省告示第六號

私立九段精華高等女学校ヲ東京府東京市麹町區飯田町ニ設置シ明治四十四年四月ヨリ開校ノ件認可セリ

明治四十四年一月十七日

文部大臣 小松原英太郎

更に、『官報』第二千九百八十九號（大正十一年七月十九日）¹⁶に、次の如く「告示」されている。

●文部省告示第四百九十二號

東京府東京市麹町區飯田町ニ設置セル私立九段精華高等女学校ヲ九段精華高等女学校ト改稱セリ

大正十一年七月十九日

文部大臣 鎌田榮吉

右掲の史料から、「九段の精華女学校」とは、明治四十四年に東京府東京市麹町區飯田町に「私立九段精華高等女学校」として設置・開校され、大正十一年に「九段精華高等女学校」と改称された学校を指す、と判断される。

九段精華高等女学校は昭和二十年三月九日から十日にかけての米国空軍の戦略爆撃の為に、文字通り灰燼に帰し、終戦後は進駐軍によって跡地が接収され駐軍場として使用された。同校関係者は米国軍司令部及び関係官庁に接収解除を働きかけたが、復校相叶わず、廃校となった¹⁷。今日、東京都千代田区九段南一丁目一六・一十七号の千代田会館の付近に立つ「九段精華学校発祥地」の石碑のみが同校を偲ぶ縁となつている。

九段精華高等女学校の斯かる廃校の経緯から、同校に関する一次史料

（前略）

私立高等女学校設立認可願

今般東京市麹町區飯田町壹丁目十六 十七番地ニ於テ別紙要項ノ通り私立高等女学校設立致度候條御許可成度此段相願候也

明治四十三年十月十四日

東京市牛込區砂土原町三丁目二十三番地

長野縣平民 湯本武比古^①

私立高等女学校設立要項

- 一 名稱 私立精華高等女学校
 - 二 本科ノ修業年限 五箇年
 - 補習科ノ修業年限 壹箇年
 - 三 本科ノ生徒定員 參百名
 - 補習科ノ生徒定員 四拾名
 - 四 開校年月日 明治四十四年四月一日
 - 五 經費及維持ノ方法 別紙ノ通り
 - 六 位置 東京市麹町區飯田町壹丁目十六、十七番地
- 別紙圖面之通り精華學校内ノ一部ヲ教室ニ充テ四十四年度ハ先ツ二教室充當シ四十五年度ハ更ニ設備ヲナス

（後略）

この史料から私立精華高等女学校の設立者・修業年限・規模等だけではなく、所在地が当時の表記で「東京市麹町區飯田町壹丁目十六、十七番地」であつた事も判明した。

大正元年刊行の『現代人名辞典』

上巻¹⁹を繙くと、「岩崎久彌男」即ち「三菱合資会社社長」の男爵岩崎久彌（一八六五—一九五五）の件に住所として「本郷區湯島切通町一電話特長下谷二五六同區駒込上富士前町二三電話下谷二五六深川區清澄町八電話浪速五〇四」とある。「本郷區湯島切通町一」は岩崎家の本邸の

所在地であり、所謂「茅町の岩崎邸」である。そこにはイギリス人建築家ジョサイア・ランドル (Josiah Conder 一八五二—一九二〇) による壮麗な洋館が岩崎家の本邸として明治二十九年に建設されて、しかもそれは現存している。「深川區清澄町八」は岩崎家の別邸の所在地である。因みに岩崎久彌は清澄町の別邸の東半分を大正十三年に公園用地として東京市に寄付し、同市によってそこは整備されて昭和七年に「清澄庭園」として公開された所である²⁰。本郷區「駒込上富士前町二三」は、柳沢吉保

(一六五八―一七一四)の下屋敷でもあった「六義園」を、明治期に岩崎家が買収し、それを拡大整備した結果に成立した、同家の別邸の所在地である(昭和十三年に、同所は東京市に寄付された²¹⁾)。それ故、駒込に別荘を持つ「岩崎様」とは、「本郷區駒込上富士前町二三」の「六義園」を別邸にする「三菱合資会社社長」の男爵岩崎久彌を指すのであろう。

「三菱社」の創設者岩崎彌太郎(一八三四―一八八五)の長男である岩崎久彌は、三男三女を儲けており、娘は長女美喜、二女澄子、三女綾子となっている²²⁾。長女(澤田)美喜(一九〇一―一九八〇)はエリザベス・サンダースホームの設立者として著名であるが、学んだのは「お茶の水東京女子高等師範附属中学部」である²³⁾。注目すべき事には、次女(甘露寺)澄子(一九〇三―一九三七)及び三女(福澤)綾子(一九一一?)の出身校は何れも九段精華高等女学校なのである²⁴⁾。作家の森あゆみによる福澤綾子からの「聞き書き」²⁵⁾によれば、「九段精華は小ぢんまりして、湯島からも近かったので、人力でまいました。」と



岩崎澄子の写真「大正十一年・夏」…国立国会図書館所蔵 澤田美喜子編纂『澄子』(甘露寺方房刊行 昭和十三年) 所収より

なっている。ここに言う「湯島」とは岩崎家の本宅である所謂「茅町の岩崎邸」の所在地に他ならないから、岩崎家の本邸から九段精華高等女学校に人力車で通学したという、恠に刮目に値する述懐である。こうした点にこそ「岩崎様の別荘」の「お嬢様」を「學生俵夫」の「弘一」が人力車で送迎したという設定の根拠が有ろう。又、駒込の「岩崎様の別荘」から「お嬢様」が通学するという設定は、同所が本作品発表の前年、即ち昭和十三年に岩崎久彌から東京市に寄附されて、話題となった事に由来するのではないかとも思われる。

次女澄子の場合、澤田美喜子編纂『澄子』(甘露寺方房刊行 昭和十三年) 所収の小谷六子「故甘露寺

澄子様を悼みて」²⁶⁾によれば、九段精華高等女学校の卒業は「大正九年三月廿日」とあり、同書に抄録されている甘露寺澄子の日記にも大正九年「三月廿日」の件に卒業式の様子が克明に記されている²⁷⁾。従って、岩崎久彌の次女澄子の九段精華高等女学校在学期間は大正四年四月から同九年三月迄ということになる。世耕弘一先生の學生俵夫としての活動期間は、前述の如く最大限見積もって大正五年位から同十二年三月位迄であるから、本作品で學生俵夫「弘一」が送迎した、駒込の「別荘」から「九段の精華女学校」に通学する「岩崎様」の「お嬢様」のモデルは、年令及び高等女学校在学期間から観て、岩崎久彌の三女綾子も考えられないこともないが、次女澄子が最も相応しいと思われる。

4

本作品の年代設定については、日本大學入学後を取り扱っている最後の段である「榮譽」の段を除けば、「弘一」は「頑固親爺の情」の段で「大學に入る試験勉強」をしている事、「金一封」の段でも「日本大學の試験の勉強を始めてゐた」事から、これを日本大學豫科の入学試験の勉強と解するならば、世耕弘一先生が日本大學豫科に入学されたのが大正七年である事を勘案すると、大正七年頃という事になる。だが、「鞭」の段では大連に渡ったのが「二十二の歳」であり、大連・旅順・朝鮮を

巡り、その間に種々の職業を経験し、「さうして四年前に東京に出て来て、今は俵夫」であると記されているから、旧満州での生活を仮に一年とするならば、「今は」二十七歳という事になる。『回想世耕弘一』所収の「世耕弘一年譜」に世耕弘一先生は大正四年に二十二歳で旧「満州に渡る」とある記述、大正九年に二十七歳で日本大學に「入学する」とある記述と合致するという事になるのである。然るに、大正七年に世耕弘一先生は日本大學豫科に入学されているから、試験の勉強の為に大正九年に正則英語學校に通学されたとは考えにくいのであり、この点は聊か論理が通り難いと言えよう。

次に、本作品の空間的世界は、「過失」・「金一封」の段に詳しく描かれている。起点は、「過失」の段に出て来る「岩崎様の別荘」の所在地である「駒込」である。「俵夫達」から「ガリ屋」と綽名される「親方」の「車宿」の所在地や「弘一」の下宿の所在地を窺わせる記述はないが、論理的に考えて駒込か、その周辺であろう。そして、その起点から向かうのは「精華女学校」のある「九段」及び「正則中學校」(ママ)や「正則英語學校」や「夜學」のある「神田」である。つまり、駒込・九段・神田という三地点を結ぶ空間が、この作品の主な空間的世界なのである。「頑固親爺」の段で「弘一」は夜中も「俵夫」として働いているとされるが、ここで

はその点には触れない。

東京日日新聞監修・大正十一年四月五日発行『最新式 大東京地圖 番地入』²⁸（以後、この地図は『最新式 大東京地圖 番地入』と略称する）と題する非常に貴重な地図を私有しているのが、駒込の「岩崎様の別荘」・九段の「精華女学校」・神田の「正則英語学校」をこの地図で、先ず確認したい。駒込の「岩崎様の別荘」、即ち「六義園」の所在地は、先に言及した『現代人名辞典』掲載の「岩崎久彌男」即ち「三菱合資会社社長」の男爵岩崎久彌の件に住所として記載されている本郷區「駒込上富士前町二三」であるから、この地図で①で示した場所である。事実、この地図でもそこに「岩崎邸」と記されている。

次に、世耕弘一先生が通学されたと思しき大正時代の正則英語学校に関する一次史料は従来殆ど発見されておらず、同校の客観的実態は殆ど不詳であった。同校の当該時期に関する史料の有無を、その後身校である正則学園高等学校に問い合わせたが、それは皆無という回答であり、大正十二年の関東大震災で正則英語学校が灰燼に帰した事に起因するのであろう。

そこで、正則英語学校に関する一次史料の採取に努めた結果、二点の貴重な史料を発見する事が出来た。その第一は、次の様な同校に関する「私立學校設立願指令按」²⁹である。

私立學校設立願指令按

本郷區西片平町十番地は、九號

斎藤秀三郎

明治廿九年九月二日付願私立正則英語學校設立ノ件認可ス

府知事

年月日

理由 別紙私立學校設立願ニ依り調査候處學科程度及校舍ノ坪數教員ノ員數并學力等又設立者目下高等官奉職中ノモノニ候間身分差支無

之認メ候ニ付本按聴許相裁可然加乎仰高裁候也

私立正則英語學校設立願

東京市本郷區西片平町十番地は、九號

寄留宮城縣士族

齋藤秀三郎

慶應二年正月生

私儀今般私立正則英語學校設立致度東京府令第二十四號第三條ノ項目相調別紙調書相添此段奉願候也

明治二十九年九月二日

右

齋藤秀三郎

東京府知事 侯爵 久我 道久殿

（後略）

大下宇陀児著『土性骨風雲録 教育と政治の天下人 世耕弘一伝』にある、世耕弘一先生が旧満州から東京に戻られた箇所³⁰で「さっそく、大湊木材時代から目をつけていた神田の正則英語学校へ行つて規則書をもらつてきた。この学校には夜学がある。」という記述から、正則英語学校は入学志願者に「規則書」を配布していたと推察されるのである。時代的にはやや下がるが、大正八年十二月二十六日刊行『官報』第二二二〇號、大正九年一月四日刊行『官報』第二二三號、大正九年一

月六日刊行『官報』第二二四號に掲載されている「正則英語學校豫備學校生徒募集」の広告に「規則書入用者要郵券二錢」とあるのを見出した。

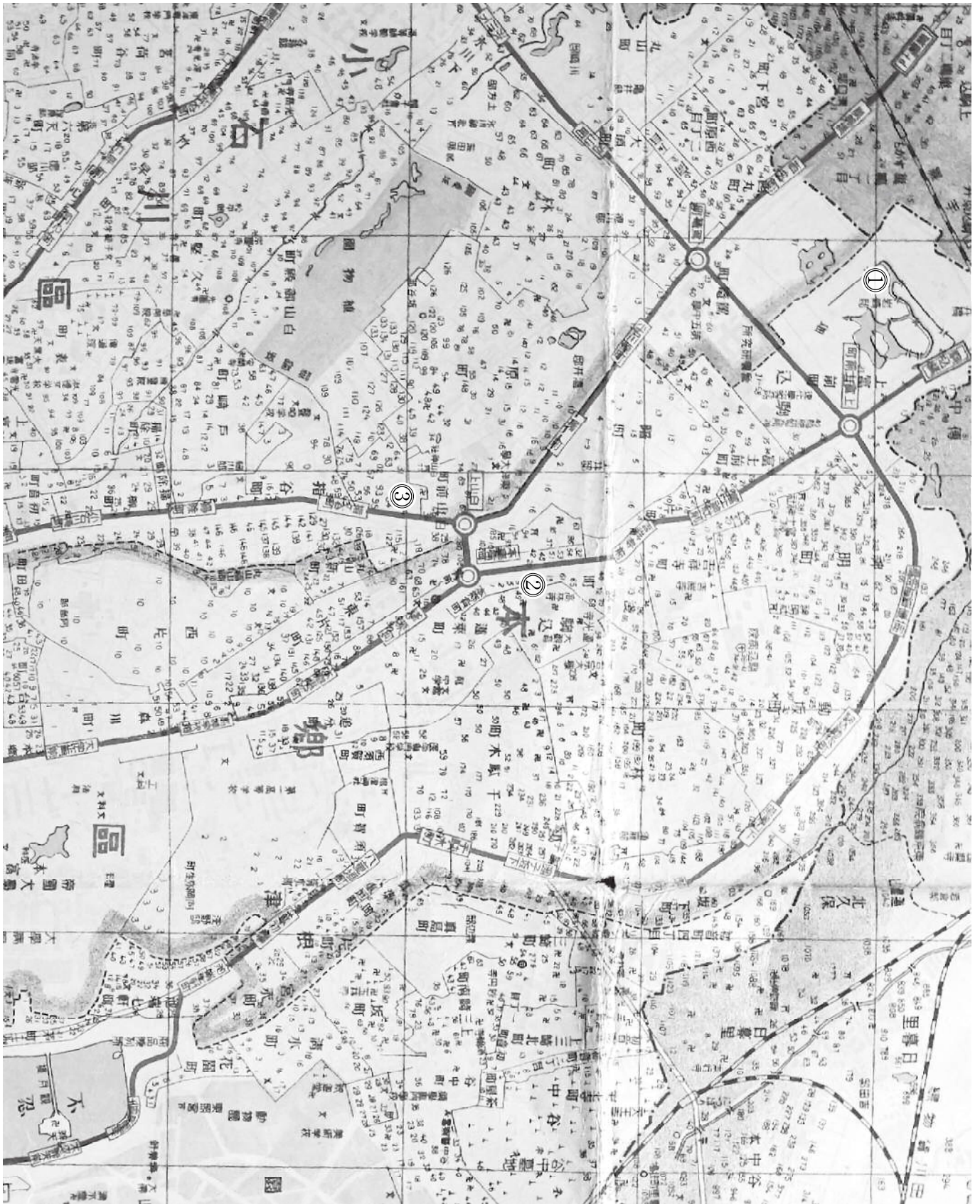
そこで、正則英語学校の「規則書」を長時間に亘り粘り強く博搜した結果、幸いに最近発見・入手出来た。

それがもう一点の極めて貴重な一次史料の「正則英語學校規則一覽」³¹であり、縦約四十五・八センチ、横約六十二・三センチの大型紙両面印刷である。表には次の様に表題が付けられ、その下の枠内に規

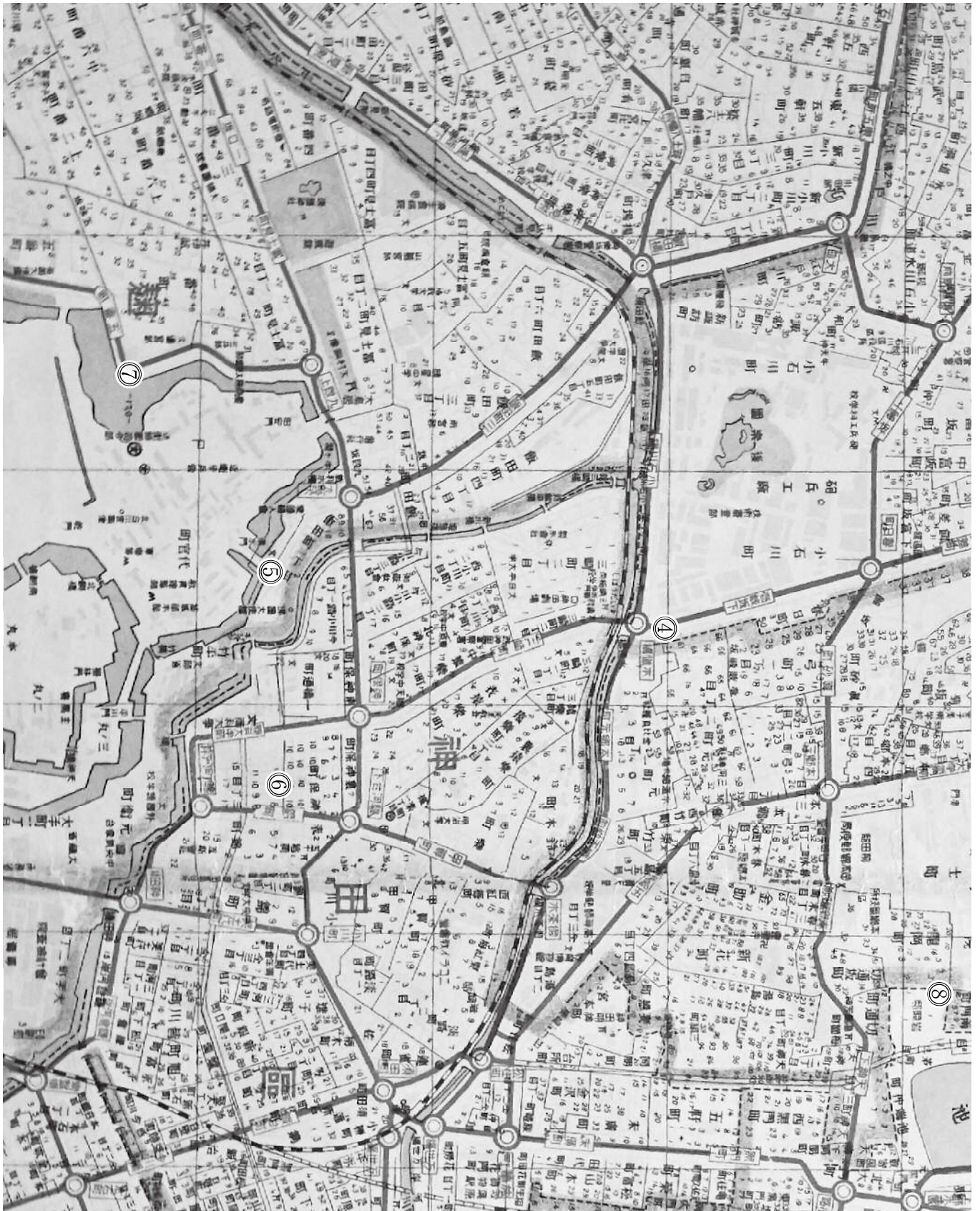
則・書類様式・開講科目・担当者・授業時間帯（午前部・午後部・夜間部）等が極めて詳細に印刷されており、表題横の左肩には「入會規則」、右肩には「正則英語學校講義録」の広告が印刷されている。

（大正元年十一月）

正則英語學校規則一覽
所在地東京市神田區錦町三丁目二番地
（電話本局二〇九六番）



東京日日新聞監修『最新式 大東京地図 香地人』(大正十二年四月五日發行)部分
 ①岩崎町(明邸) ②本郷 ③白山坂



東京日日新聞監修『最新式 大東京地圖 番地入』(大正十二年四月五日發行)部分
 ①水道橋 ②精華高等女學校 ③正則英語學校 ④千鳥ヶ淵 ⑤岩崎邸(本邸)
 ⑥ ⑦ ⑧

以上から、明治二十九年に設立された正則英語学校の実態が初めて正確に分かっただけではなく、その所在地は当時の「東京市神田區錦町三丁目二番地」である事が、一次史料に依って確定出来た訳であり、そこは『最新式 大東京地圖 番地入』に於いて⑥で示した場所である。

更に、九段の「精華女学校」即ち九段精華高等女学校の所在地は、先に掲げた同校の設立認可に関する史料に記されている様に、「東京市麹町區飯田町壹丁目十六、十七番地」であるから、『最新式 大東京地圖 番地入』に於いて⑤で示した場所である。

5

ここで、重要になってくるのは、『學生俤夫』の主人公「弘」が、人力車で「岩崎様」の「お嬢様」を「精華高等女学校」に送迎するという労働をしつつ、「正則英語学校」に通学する為に、大正十一年四月刊行の『最新式 大東京地圖 番地入』に於いて示されるような東京で、日々如何に空間移動しながら活動しているかであり、それをIdealypus (理念型)として次に提示してみよう。

朝、「車宿」附近であらう「下宿」を出た「弘」は、「車宿」(『最新式 大東京地圖 番地入』の①附近か?)にある人力車を引いて、駒込の「岩崎様の別荘」即ち東京市「本郷區駒込上富士前町二三」の「六義園」(『最新式 大東京地圖 番地入』の①)に赴き、「岩崎様」の「お嬢

様」を乗せて、本郷(『最新式 大東京地圖 番地入』の②)の町を「矢のやうに走」り抜けて、長坂で知られる「白山坂」(『最新式 大東京地圖 番地入』の③)を駆け下り、神田川の水道橋(『最新式 大東京地圖 番地入』の④)を渡り、そこから南南西方向に進み、「東京市麹町區飯田町壹丁目十六、十七番地」の「九段精華高等女学校」(『最新式 大東京地圖 番地入』の⑤)にこの「お嬢様」を送り届ける。「弘」は人力車を同校の「供待ちに預けて」、「東京市神田區錦町三丁目二番地」にある「正則英語学校」(『最新式 大東京地圖 番地入』の⑥)に徒歩で向かい、「自午前八時正午十二時」の「午前部」の授業を受けて、「午後二時」つぎに「九段精華高等女学校」(『最新式 大東京地圖 番地入』の⑤)に徒歩で引き返し、同校の「供待ちに預けて」いた人力車に「お嬢様」を乗せて、往路と逆に神田川の水道橋(『最新式 大東京地圖 番地入』の④)を渡り、長坂の「白山坂」(『最新式 大東京地圖 番地入』の③)を駆け上がり、本郷(『最新式 大東京地圖 番地入』の②)の町を「矢のやうに走」り抜けて「駒込の邸に令嬢を送り込むと、またもや神田の夜學の教室に取つて返す」、即ち「正則英語学校」(『最新式 大東京地圖 番地入』の⑥)に徒歩で向かい、同校で「自午後六時正午後九時」の「夜間部」の授業を受講して、それを終えて、

徒歩で車宿(『最新式 大東京地圖 番地入』の①附近か?)に程近い「下宿」戻る。

「岩崎様の別荘」、即ち「六義園」の当時の所在地である東京市「本郷區駒込上富士前町二三」は、現在の東京都文京区本駒込六丁目あたりであり、「九段精華高等女学校」の当時の所在地「東京市麹町區飯田町壹丁目十六、十七番地」は、現在の東京都千代田区九段南一丁目二あたりであるので、この間の直線距離は約四・四キロメートル程である³²。「正則英語学校」の当時の所在地である当時の「東京市神田區錦町三丁目二番地」は、現在の東京都神田錦町三丁目一あたりであるから、「九段精華高等女学校」の會ての所在地から直線距離は約〇・八キロメートル程である。「岩崎様の別荘」、即ち「六義園」の当時の所在地附近と「正則英語学校」の当時の所在地の間の直線距離は約四・八キロメートル程である。従つて、「學生俤夫」の主人公「弘」が日々の空間移動のIdealypus (理念型)から計測すれば、約二十キロメートル程であり、その内の約八・八キロメートル程は人力車を引きながらの空間移動となる。

又、「學生俤夫」の主人公「弘」は当時の東京市の北端の閑静な山の手から長坂の「白山坂」等を経て中央部の低平地に駆け下り、又逆に駆け上がっている。「岩崎様の別荘」、即ち「六義園」の当時の所在地であ

る東京市「本郷區駒込上富士前町二三」、即ち現在の東京都文京区本駒込六丁目あたりの標高は海拔約二十三メートル程であり、「九段精華高等女学校」の当時の所在地「東京市麹町區飯田町壹丁目十六、十七番地」、即ち現在の東京都千代田区九段南一丁目二あたりの標高は海拔約九メートル程であり、「正則英語学校」の当時の所在地である当時の「東京市神田區錦町三丁目二番地」、即ち現在の東京都神田錦町三丁目一あたりの標高は海拔約五メートル程である。それ故に、「學生俤夫」の主人公「弘」は、斯かるアップ・ダウンのある右掲の距離を、「俤夫」として人力車を引くという過酷な労働して移動し、「學生」として歩いている事になる。

しかも、「學生俤夫」の「弘」が空間移動する地点の標高差は移動のスピード感を、単に際立たせているだけではない事に思いを輪さねばならないのである。翻つて按ずれば、「岩崎様」の「お嬢様」が「別荘」から毎日、女学校に通学するのは聊か通りにくいとも言える。

事実、岩崎久彌の三女である福澤綾子の回想によれば、彼女が「精華学校」に進んだ一つの理由として居住する「茅町の岩崎邸」(『最新式 大東京地圖 番地入』の③)から近かった事及び同邸から通学した事を、その回想で語っているのである³³。「茅町の岩崎邸」が岩崎家の本邸であることは当時でもよく知ら

れているのに、「岩崎様」の「お嬢様」が当時の東京市北端の山の手である駒込の同家別邸の六義園から東京市の中心部の低平地に位置する「九段精華高等女学校」に通学する事に敢えて設定し、更に標高の低い神田錦町に位置する「正則英語学校」に「學生俤夫」の「弘一」が通学するのを強調する事によって、当時の社会も巧みに際立たされている事にも思いを輸さなければならぬのである。

穂積驚の本作品に於ける斯かる巧みな空間世界の構築も完璧ではない点もある。例えば、「過失」の段で、「岩崎様」の「お嬢様」を「九段精華高等女学校」に送り届ける「學生俤夫」の「弘一」が、「白山坂」も一気に駆け下りた。千鳥ヶ淵も瞬く間に通り過ぎた。」とあるが、水道橋を渡って行くと、「九段精華高等女学校」が位置する当時の「麹町區飯田町壹丁目十六、十七番地」は「千鳥ヶ淵」(『最新式 大東京地圖 番地入』の②)よりも手前になり、「千鳥ヶ淵」を通り過ぎる必要はない。恐らくは、穂積驚が「九段精華高等女学校」の位置の確認を十分に行い得なかったか、上京後数年の為に東京市の地理を葉籠中の物とし得ていなかったかに由来するのであろうか。

6

本作品の登場人物で、「岩崎様」の「お嬢様」以外に、考察の対象とし

なければならぬのは、「俤夫達」から「ガリ／＼屋」と綽名される「車宿の親方」である。本作品に於いてこの人物に関しては、その名前、車宿の屋号や所在地は具体的に記述されていない。だが、『土性骨風雲録』に於いては、名前は「丸田源次郎」、車宿の屋号は「かどや」で、所在地は市電の「上富士前」附近となっている。³⁴『職業別電話帳 東京之部 大正十一年版』(日本商工通信社 大正十一年)の「宿車」、つまり人力車営業の項目³⁵では、これに合致するものは今のところ見出せない。因みに、「榮登」の段で、「弘一」は大學の試験も一年半で殆ど及第し、残り七、八科目という時期³⁶に可成りの貯えも出来たので、「根津に、獨立で車宿を開業した」とあることから、同右の電話帳で見ても、これ又出てこない。本作品に出て来る「車宿の親方」や彼が営業する車宿等については、今後引き続き、関係一次史料を探索する他はない。

それで、ここではこの当時の東京市の車宿や人力車についての統計数字を挙げてみよう。

東京府の車宿と挽子数は「警視庁統計書」³⁷によると、大正五年・大正九年・大正十一年の場合、次の様になっている。

| | 東京府 | | | 全国総計 | | | 車宿一軒当り 挽子数(人) |
|-------|-------------|------------|------------|------------|------------|------------|------------------|
| | 区 | 郡部 | 合計 | 区 | 郡部 | 合計 | |
| 大正五年 | 163 | 32 | 195 | 647 | 119 | 766 | 3.9 |
| 大正九年 | 199 | 42 | 241 | 1102 | 286 | 1388 | 5.8 |
| 大正十一年 | 195 | 28 | 223 | 1113 | 291 | 1404 | 6.8 |
| | 一七、二四二 | 一六、六三四 | 一七、三八八 | 一八、四四七 | 一九、四二九 | 一八、二八二 | 一七、三四八 |
| | 一六、一八六 | | | | | | |
| | 一五、二二九 | 一一、二六八 | 一一、三二七 | 一一、三二七 | 一一、三二七 | 一一、三二七 | 一一、三二七 |
| | 大正五年三月三十一日 | 大正六年三月三十一日 | 大正七年三月三十一日 | 大正八年三月三十一日 | 大正九年三月三十一日 | 大正十年三月三十一日 | 大正十一年三月三十一日 |
| | 大正十二年三月三十一日 | | | | | | |

前述の如く、世耕弘一先生が旧満州から帰国されて東京で再活動され始めたのは大正五年乃至六年頃と推測され、日本大学を卒業されたのは大正十二年と確認出来ているので、この間の人力車の台数を内閣統計局編纂の『日本帝國第三十五統計年鑑』(大正五年十二月刊行)³⁸・『日本帝國第三十六統計年鑑』(大正七年一月刊行)³⁹・『日本帝國第三十七統計年鑑』(大正七年十二月刊行)⁴⁰・『日本帝國第三十八統計年鑑』(大正九年十二月刊行)⁴¹・『日本帝國第三十九統計年鑑』(大正十年二月刊行)⁴²・『日本帝國第四十統計年鑑』(大正十年十二月刊行)⁴³・『日本帝國第四十一回統計年鑑』(大正十一年十二月刊行)⁴⁴・『日本帝國第四十二回統計年鑑』(大正十三年二月刊行)⁴⁵に収録されている人力車に関する統計数字を抜粋して、この時期のその台数を整理してみると、次の通りである。

こうした統計数字から、当時の東京府の車宿の経営規模は何れも然程大きくなく、当時の東京府に於いては車宿以外の人力車も多かった事も推測される。

更に本作品の登場人物で実名が出て来る事で注目されるのは、伏見丸でドイツ留学に向かう「弘一」は、関東大震災で「東京横濱全滅」といふ凶報に接し、「恩師」や「友人知己先輩の安否を訪ね」に帰国すべきか、されど「留學の使命もまた重い」と苦悩するが、結局、「弘一」は「自分に與へられた使命は、東京に引き返すことではなくて、留學を完うするにある」と、「決然」として心に決め

た⁴⁶という件で「恩師山岡萬之助先生」の名前が出て来る事であり、山岡萬之助先生に関しては本広報誌掲載の拙稿で何度も言及しているの⁴⁷で、ここではそれは割愛する。本作品のこの件は、ベルリンから発信された山岡萬之助先生宛の一九二三年十一月二日付けの世耕弘一先生の書簡の左の如き冒頭部の記述と全く一致するのである。

如き東京大學に於ける明治十四年八月二日付け「達」⁴⁹であろう。

総理 教務課[㊦] 教務課[㊦]
 全心得
 全補助
 東京大學法學部
 東京大學理學部
 東京大學醫學部
 東京大學文學部
 本科生徒之義自今學生
 ト相唱候條此段爲心得相達
 候事
 明治十四年八月二日
 東京大學總理加藤弘之

十六（一八九三）年から日本大學豫科入学の年である大正七（一九一八）年までの間の各年に「苦學」を取り扱った書籍が何点刊行されたか、その数を挙げると、左の如くなる⁵⁰。

先生へ 十一月二日 在伯林
 謹啓先生に御健康専々一奉祈候之れ門下生一同同様にて願ふ事に有之候母校震火之報上海著港之節拝聞候間此の儘留學中止下船先生の膝下馳せ参し何かの御用勤めすべきか又は留學すべきかと色々煩悶仕候然れとも色々思案の末母校か難に心引かれつつも留學の目的達する事に決心し断然出發入獨仕候何卒此の儀心中御了察の上格別の御仁恕奉願候
 （後略）

弘一拝

7

次に、考察の組上に載せる必要があるのは、本作品に出て来るチームである。それは、先ず第一に本作品のタイトルにもなっている「學生傳夫」として出て来る「學生」であり、第二に「鞭」の段に頻出する「苦學」である。

先ず、「學生」という語から瞥見

すると、近代になって「學生」という語が公文書で最初に使われた事例は、陸軍戸山學校の明治六年八月七日付け「戸山學生規則」であることが判明している⁴⁸。しかし、「學生」という呼称が定着するのに決定的な影響を与える事になったと考えられる重要な一次史料を挙げると、次の

右掲の史料は、東京大學の「本科生徒」は「學生」と相唱える様にとの東京大學總理加藤弘之（一八三六一一九一六）から東京大學の四學部に対する「達」であるから、本来「學生」は当時の東京大學の「本科生徒」のみを指す固有名詞だったものであり、これがその後的高等教育機関で学ぶ者全般を指す普通名詞化した、と考えられる。

このような成り立ちやニュアンスを持つ「學生」という語が、厳しい肉体労働に従事する傳夫の語と結合して、「學生傳夫」という語が成り立っている事を知っておく必要があるであろう。

次に、「苦學」という語を考察の組上に載せるとすると、先ず概括的に世耕弘一先生の生年である明治二

| 年次 | 右掲の統計数字から、明治三十五 一三十六年、明治四十二一四十五年、 |
|--------|--------------------------------------|
| 明治二十六年 | 五 |
| 明治二十七年 | 六 |
| 明治二十八年 | 四 |
| 明治二十九年 | 四 |
| 明治三十年 | 八 |
| 明治三十一年 | 五 |
| 明治三十二年 | 八 |
| 明治三十三年 | 十三 |
| 明治三十四年 | 十一 |
| 明治三十五年 | 三十五 |
| 明治三十六年 | 二十八 |
| 明治三十七年 | 十五 |
| 明治三十八年 | 十 |
| 明治三十九年 | 十六 |
| 明治四十年 | 二十四 |
| 明治四十一年 | 十九 |
| 明治四十二年 | 三十三 |
| 明治四十三年 | 五十八 |
| 明治四十四年 | 五十二 |
| 明治四十五年 | 五十三 |
| （大正元年） | |
| 大正二年 | 十八 |
| 大正三年 | 十五 |
| 大正四年 | 二十二 |
| 大正五年 | 二十六 |
| 大正六年 | 二十三 |
| 大正七年 | 十二 |

大正四一六年に刊行数が顕著に増加している事が瞭然である。こうした時期に於ける「苦學」を取り扱った書籍の刊行の繁盛には、当然背景がある。例えば、日清戦争後、小学校への就学率が急激に上り、明治三十三年の「小學校令」で義務教育四年制が確立され、同時に二年制の高等小学校の並置が推奨された⁵¹。そうした結果、明治三十五年次には「学齡兒童の就学率」が、男九十六・八パーセント・女八十七・六パーセント・平均九十一・六パーセントとなり、就学率がこの年次に九十パーセントを超えたのである⁵²。又、明治三十六年三月二十六日に公布された「勅令第六十一號 専門學校令」に「専門學校ノ入學資格」の規定に関する第五條があつた事、それに相応して同年三月三十一日に「専門學校入學者檢定規程」が「文部省令第十四號」として定められた事も見逃せない（この点に関しては、本広報誌前号掲載拙稿を参照されたい）。明治時代末期から大正時代初期には、尋常小学校の卒業者の十パーセントから二十パーセントが高等小学校に進学したが、その八十パーセントから九十パーセントは上級学校に進学していない⁵³。こうした事実が、「苦學」を取り扱った書籍の刊行の繁盛、延ては「苦學」そのものの盛行の背景にあったのであろう。このような時代的背景はそれ自体極めて大きな問題であるから、ここではこれ以上立ち入る事は

出来ないし、その必要も無いが、ここでは是非指摘しておかねばならないのは、右に指摘した内の第三のピークの時期こそは、世耕弘一先生が苦学生として精励しておられた時期に合致する事である。

8

ことになろう。「苦學生」に最適な職業として「車夫」を推奨するこの種の指南書は、枚挙に暇がないと言つてよいのである⁵⁷。

注目すべきは、こうした書籍の中には「苦學」の仕方の実践的な指南書も多数存在しており、例えば、世耕弘一先生の「苦學」時代に僅かに先立つ大正四年に刊行された東京實業研究會編『東京苦學成功法 附録 東京立身就職の手引』（大成社發行）では「苦學生の最好職業」が列挙されており、「車夫」は「身體が頑健で労働を厭わぬ者には車夫が最も適當だ」⁵⁴として推奨され、その実際が解説されている。しかも、刮目すべきには「人力車夫などは晝間などよりも夜の方が思はぬ収入が有るものであるから」、「苦學生諸君が車を曳くとしたら如何しても晝間學校に通つて、仕事として夜引いた方が得策である」⁵⁵と力説されているのである。と言うのも、『土性骨風雲録』では、「神田の正則英語學校」の「夜學」の「親しい学友の一人」が「俾曳きは自分の時間というものがもてるよ」として「曳き子」を推奨し、しかも「よる夜中だつて仕事ができるだろう。夜専門にやれば晝間の學校にだっていけるじゃないか。」と述べているからである⁵⁶。これが事実であれば、この友人はここに掲げた様な「苦學」の仕方に関する実践的な指南書を読んで、教えて呉れた

本作品の末尾には、既述の如く、「現在日本大學の教授として、又政友會の花形代議士として令名高い世耕弘一氏の半生は、このやうに血と涙の結晶であつた」と附記されている事に鑑み、本作品が掲載された『キング』（第十五巻第四號）が刊行された昭和十四年四月前後の政治的状况とその只中に於ける世耕弘一先生の立憲政友會所属の衆議院議員としての政治的活動の一端に触れて、擲筆する事にしたい。

世耕弘一先生は昭和十二年の四月三十日に第二十回衆議院総選挙で当選された。この選挙の翌年に、招集された第七十四回帝國議會の「衆議院議員席次表」と題する非常に貴重な史料を入手出来たが、そこには「69 世耕弘一」と認められる。同十二年六月四日に林銑十郎内閣に代わつて成立した第一次近衛文麿内閣は、その直後の七月七日に勃発した日中戦争に不拡大方針を執つたが⁵⁸、失敗した。同内閣のもとで戦時統制経済への移行が開始され、「企画院官制」に関する「勅令第六百五號」（同年十月二十三日）で同年十月二十三日に公布・施行されて⁵⁹、発足した企画院によつて具体的政策が進められ、又翌十三年三月三十一日には国

家総動員法が公布された⁶⁰。

世耕弘一先生は『政友』四百五十九號（昭和十四年一月刊行）に「企画院の思想？」⁶¹と題する論説を投稿され、戦時統制経済体制の事実上の中心たる「企画院」の思想と政策を舌鋒鋭く批判され、論を展開されている。企画院が行おうとしているのは「資本主義の強化」ではなくてその「修正」で、「社会主義の前提」となっている危険がある。更に、企画院で立案される法案は「重大法案」であるにも関わらず、「國民の意」を反映しないものであり、しかも議會の「審議」も許さず独断専行であるとして、議會制民主主義の形骸化に警鐘を鳴らされているのである。統制経済推進の中心的機関である企画院に対する斯かる批判的論説は、昭和十五年一月十日刊行『立憲政友』第十號に掲載されたが、同月十三日に全文削除の処分を受けた「諸事統制廢止之事」⁶²、同年五月三十一日に禁止処分を受けた『統制流行憂多』⁶³といった統制経済に対する痛烈な批判的著述の伏線を成すものと判断される。それ故、昭和十四年劈頭に公表された、この論説は改めて刮目に値するものと言えよう。又、視点を變えて言えば、企画院が中心となつて推進する統制経済に対する先生の批判的著述が、準備されていたのが、昭和十四年当時だったのである。

この第一次近衛文麿内閣は内部対立が顕著となり、昭和十四年一月に「支那事變の新段階に對處 内閣刷

第四十七條 帝國議會

1. 姓名: 李 明
 2. 性别: 男
 3. 年龄: 25
 4. 籍贯: 广东
 5. 职业: 教师
 6. 学历: 本科
 7. 婚姻状况: 未婚
 8. 健康状况: 良好
 9. 兴趣爱好: 阅读, 运动
 10. 自我评价: 性格开朗, 乐于助人

※印を附けた所に「69 世耕弘一」が認められる。

新強化の爲」を名目にして総辞職した。⁶⁴ 同月五日に枢密院議長であった平沼騏一郎（一八六七—一九五二）が首相の印綬を帯びて、挙国一致内閣として平沼内閣が成立した。だが、同内閣でも閣内不一致が顕著となり、同年八月二三日に独ソ不可侵条約が成立したのを機会に、ヨーロッパ情勢は「複雑怪奇」の声明を出して同内閣も総辞職した。⁶⁵ 斯かる状況下で政党政治も混迷を深め、諸政党内部にも深い分裂が露呈していく。例えば、世耕弘一先生が所属される立憲政友会内部では、所謂「親軍的」立場を執る中島知久平（一八八四—一九四九）を中心とする中島派は軍部との関係を重視したのに対して、立憲政友会前総裁鈴木喜三郎（一八六七—一九四〇）の派閥を受け継いだ鳩山一郎（一八八三—一九五九）を中心とした鳩山派はそれとの距離を置き、両者は対立を深めて同党は分裂状態となり、前者は立憲政友会革新派、後者は立憲政友会正統派と呼ばれるようになった。⁶⁶ 世耕弘一先生は鳩山一郎と行動を共にして、立憲政友会会正統派に属して活躍された事は言うを俟たない。そして、同年四月三十日の立憲政友会革新派大会で中島知久平が総裁に選ばれ、五月二十一日の立憲政友会正統派大会で久原房之助（一八六九—一九六五）が総裁に選ばれて、ここに立憲政友会が完全に分裂するのである。⁶⁸ 更に敷衍するならば、世耕弘一先生が属しておら

れた立憲政友会正統派もその後一旦解党するものの、恰も伏流の如く、彼の「同交会」に連なっていくのである。

昭和十四年当時の斯かる政治的情勢の只中で、「政友会の花形代議士」として令名高い「世耕弘一先生の名人入りの小説である『学生俤夫』が、幅広い社会層に愛読された雑誌『キング』⁶⁹に掲載された事は、今後改めてその意義が問われなければならないのであろう。

注

- 1 『キング』第十五巻第四號（日本雄辨會講談社 昭和十四年）。
- 2 穂積驚『長谷川伸・その人』（森直樹出版 昭和五十六年）。
- 3 『キング』第十二巻第六號（日本雄辨會講談社 昭和十一年）五五二—五七三頁。
- 4 『キング』第十二巻第十一號（日本雄辨會講談社 昭和十一年）五九四—六一九頁。
- 5 『キング』第十二巻臨時増刊第十三號（日本雄辨會講談社 昭和十一年）二三〇—二五一頁。
- 6 芥川・直木賞—受賞者総覧編集委員会編『一九九二年版 芥川・直木賞—受賞者総覧—』（教育社 昭和六十七年）三九七頁。
- 7 前掲書三九七頁。
- 8 大正九年十一月七日には日本大學學生會主催の北中国飢饉救済の「慈善演劇會」が同大學で開催され、「日本座」による『高田の馬

場義憤の一刃』という出し物で、世耕弘一先生は「のりやの婆」さん役を演じておられる（『日本法政新誌』第十七巻第十二號（法政學會發行 大正九年）二三三頁。『キング』第十五巻第四號（日本雄辨會講談社 昭和十四年）二二五—二二八頁）。

- 9 前掲書二二八—二三一頁。
- 10 前掲書二二八—二三一頁。
- 11 前掲書二二八—二三一頁。
- 12 前掲書二二八—二三一頁。
- 13 前掲書二二八—二三一頁。日本大學編集兼發行『日本大學七十年略史』（昭和三十四年）では、明治三十九年三月、「かねて認可申請中の科目制度による学習指導の件が文部省より認可された」ので、日本大學は「この学期（明治三十九年四月）をもって、学年制を廃して科目制度とした」のである（一一八—一九頁）。「わが日本の大學としては、画期的なもの」とされている（一一九頁）。「科目制度採用に関する要綱」には、「科目制度を採用し学生をして各自数ケ目学科目選び、随意に聴講せしむ」、また「科目制度採用により、学期試験、卒業試験等を採用し、学生をして随意に全科目を数回に分割して受験することを得さしめたり。」（一一九頁）とある。当時の日本大學の科目制度は、結果的には苦学生、即ち勤労学生にとっても好都合なものになったのである。
- 14 『キング』第十五巻第四號（日

本雄辨會講談社 昭和十四年）二三八頁。

- 15 『官報』第八千二百六十九號（明治四十四年一月十七日）。『官報』は何れも「国立国会図書館デジタルコレクション」で閲覧して利用。
- 16 『官報』第二千九百八十九號（大正十一年七月十九日）。
- 17 千代田区女性史編集委員会編『千代田区女性史』第二巻（ドメス出版 平成十二年）一三六頁。
- 18 東京都立教育研究所編集兼發行『東京教育史資料大系』第八巻（大日本印刷株式会社 昭和四十九年）三九四頁。
- 19 古林亀次郎編輯兼發行『現代人名辞典』上巻 第二版（中央通信社 大正元年）イ一頁（本書は、日本図書センターから昭和六十二年に『明治人名辞典』上巻として刊行されたものに依った）。
- 20 昭和四十八年に東京都は残る半分を購入して整備し、昭和五十二年に「清澄公園」として追加開園している（Wikipedia・清澄庭園に依拠）。岩崎家傳記刊行会編纂『岩崎久彌傳』（東京大學出版会 昭和三十六年）二九八頁。以後、本書は『岩崎久彌傳』と略称する。
- 21 『岩崎久彌傳』三〇二頁。
- 22 霞会館諸家資料調査委員会編纂『昭和華族家系大成』上巻（吉川弘文館 昭和五十七年）二〇〇頁。森あゆみ「聞き書き 岩崎久彌伝 ① 三菱財閥を背負った男」（『東京人』第十五巻第二号 東京歴史

- 文化財団 平成十二年) 一〇〇頁。
以後、本書は『東京人』と略称する。
- 23 澤田美喜『黒い肌と白い心ーサ
ンダース・ホームへの道ー』(日
本図書センター 平成十三年)
二百八十七頁。
- 24 『岩崎久彌傳』五八〇頁。西邑
木一『華族大観』(史籍出版 昭
和五十六年) 四四四頁。
- 25 森あゆみ「聞き書き 岩崎久彌
伝② 父として、家庭人として」
『東京人』第十五卷第三号 平成
十二年) 一〇二頁。
- 26 国立国会図書館所蔵 澤田美喜
子編纂『澄子』(甘露寺方房刊行
昭和十三年) 二二三頁。
- 27 前掲書七四一七五頁。
- 28 荒木康彦所蔵 東京日日新聞監
修『最新式 大東京地圖 番地入』
(大正十一年四月五日發行)。
- 29 東京都立教育研究所編集兼發行
『東京教育史資料大系』第七卷(大
日本印刷株式會社 昭和四十八
年) 九一二頁。
- 30 大下宇陀児『土性骨風雲録 教
育と政治の天下人 世耕弘一伝』
(鏡浦書房 昭和四十二年) 八十
頁。以後、本書は『土性骨風雲録』
と略称する。
- 31 近畿大学建学史料室所蔵「正則
英語學校規則一覽」。
- 32 各地点間の距離及び各地点の標
高は、「今昔マップ」(埼玉大学教
育学部谷謙二人文地理学研究室
等を利用して調べた。この通学路
のアップ・ダウンの象徴となって
いる「白山坂」は「薬師坂」等の
異称があり、文政十二(一八二九)
年の江戸幕府の地誌書『御府内備
考卷之四十四』二十二丁裏の「白
山前町」の件に「一坂 長七間
半幅式間」で「右當町北之方二有
之候尤同所妙明寺ニ薬師堂有之ニ
付里俗ニ薬師坂ト相唱申候」と記
されている。本書は「国立国会書
館デジタルコレクション」で閲覧。
33 森あゆみ「聞き書き 岩崎久彌
伝② 父として、家庭人として」
『東京人』第十五卷第三号 平成
十二年) 一〇二頁。
- 34 『土性骨風雲録』二八三―八四頁。
35 『職業別電話帳 東京之部 大
正十一年版』(日本商工通信社
大正十一年) 七六〇―七六六頁。
36 注13を参照されたし。
- 37 斎藤俊彦『人力車』(産業技術セ
ンター 昭和五十四年) 二四二頁。
38 内閣統計局編纂『日本帝國第
三十五統計年鑑』(大正五年十二
月刊行) 三三九頁。この年鑑は何
れも、東京リプリント出版社のリ
プリント版を参照した。
- 39 『日本帝國第三十六統計年鑑』
(大正七年一月刊行) 二五三頁。
40 『日本帝國第三十七統計年鑑』
(大正七年十二月刊行) 二五五頁。
41 『日本帝國第三十八統計年鑑』
(大正九年十二月刊行) 二三七頁。
42 『日本帝國第三十九統計年鑑』
(大正十年二月刊行) 二三七頁。
43 『日本帝國第四十統計年鑑』(大
正十年十二月刊行) 二二五頁。
- 44 『日本帝國第四十一回統計年鑑』
(大正十一年十二月刊行) 二四一頁。
45 『日本帝國第四十二回統計年鑑』
(大正十三年二月刊行) 二一七頁。
46 『キング』第十五卷第四號(日
本雄辨會講談社 昭和十四年)
二二七―二三八頁。
- 47 学習院大学法経図書センター所
蔵一九二三年十一月二日付の山岡
萬之助先生宛の世耕弘一先生書簡
「山岡萬之助関係文書」整理番号
H112)。
- 48 岩木勇作『学生』の起源ー教
育における呼称の歴史的研究ー』
『創価大学大学院紀要』第三十二
号(平成二十一年) 一七二頁。
- 49 東京大学図書館所蔵『校中往復
書簡之丙甲分
東京大學』(明治十四年)
四十一丁。東京大学史料室編集・
發行『東京大学史料室ニュース』
第六号(平成三年) 四頁。
- 50 「苦學」に関する資料という事
で国立国会図書館サーチでの検索
結果である。
- 51 文部省『学制百年史 記述編』
(帝國地方行政會印刷・發行 昭
和四十七年) 三三〇頁。
- 52 前掲書三二二頁。
- 53 竹内洋『立志・苦學・出世 受
験生の社会史』(講談社 平成
二十七年) 一二七頁。竹内洋著の
本書では苦學の指南書について重
要な点の指摘が為されているが、
その依拠するところの文献が網羅
的に十分には掲げられていない。
- 54 東京實業研究會編『東京苦學成
功法 附録東京立身就職の手引』
(大成社發行 大正四年) 四十五頁。
55 前掲書四十六頁。
- 56 『土性骨風雲録』一八三―一八四頁。
57 例えば、篠原静交『^{國立}東京苦學
の栞 全』(山岡商會出版部 明
治四十二年)。
- 58 御厨貴監修・矢原貞治編著『近
衛文磨』歴代総理大臣伝記叢書第
二十五卷(ゆまに書房 平成十七
年) 四〇二頁、四二一―四二四頁。
59 『官報』第三千二百四十五號(昭
和十二年十月二十五日)。
60 『官報』第三千三百七十一號(昭和
十三年四月一日)。
- 61 立憲政友會『政友』四百五十九
號(立憲政友會會報局 昭和十四
年一月刊行) 五十八―六十頁。
62 警保局図書課『出版警察報』第
百貳拾五號(昭和十五年二月)
三十八頁。本書はリプリント版(不
二出版 昭和五十七年)を利用。
63 警保局図書課『出版警察報』
第百貳拾八號(昭和十五年六月)
八十二頁。
- 64 井上寿一『政友會と民政黨』(中央
公論社 平成二十四年) 二二九頁。
65 萩原淳『平沼騏一郎と近代日本
ー官僚の国家主義と太平洋戦争へ
の道』(京都大学學術出版會 平
成二十八年) 二二三頁。
- 66 栗屋憲太郎『昭和の政党』(岩
波書店 平成十九年) 三六八頁。
67 山本熊太郎編輯・東郷實監修
『立憲政友會史 中島知久平総裁
時代』補訂版第十卷(立憲政友會

史編纂部 昭和十八年) 五一六頁。本書はリプリント版(山本四郎校訂 日本図書センター 平成三年)を利用。

68 『讀賣新聞』昭和十四年五月二十一日付「第一夕刊」。「ヨミダス歴史館」を利用して閲覧。

69 この点は、佐藤卓己『キング』の時代「国民大衆雑誌の公共性」(岩波書店 平成十四年)に於ける雑誌『キング』に対する評価に依った。

追記

三菱史料館伊藤由美子氏から岩崎家関係文献に関して貴重なアドヴァイスを頂いたことに深謝した

アーカイヴズ研究活動報告

第二期勉強会開催報告

第六回(通算第十五回)勉強会
(平成二十九年六月二十三日)

稲葉研究員と富岡研究員からアーカイヴズ関係文献(稲葉研究員:菅真城「大学アーカイヴズ考2題」私立大学・認証評価』『レコード・マネジメント』、第七十一号(二〇一六)、富岡研究員:和崎光太郎・小山元孝・富岡勝「学校史資料論の構築に向けて」活用と分類・学校統廃合・アーカイヴズ』『近畿

い。又、今回も原稿を成す上で、多くの人士の御陰を蒙ったことを記して、ここに感謝したい。

近畿大学の関係者のみは「先生」としたが、それ以外の人士については敬称を省いているので、この点は諒とされたい。

原典尊重の観点から引用史料の表現・漢字は、原則として、そのままにしている。

本広報の一行の文字数と引用した原史料のそれが違う為に、改行が原史料の通りになっていない場合は諒とされたい。

大学教育論叢』第二十八巻第二号(二〇一七)の報告がなされた。続いて、荒木研究員から、第二期調査・研究の進捗状況として、中央図書館調査と校史関係史料調査の報告がなされた。また、田窪研究員より学会(アート・ドキュメンテーション学会)参加報告がなされた。更に、一〇〇周年記念誌編纂小委員会について、同委員会と建学史料室が両輪となって記念誌の編纂を進めていく旨などが報告された。

その他、本プロジェクトの計画の修正などについて報告がなされた。(法学部教授

建学史料室研究員 上崎 哉)

近畿大学を巡る史資料 9

「『東南アジア留學生の招致と其の展望』」

国際学部准教授

建学史料室研究員 酒匂 康裕

今回、本学の歴史に関する史資料として紹介するのは、『東南アジア留學生の招致と其の展望』(以下、『東南アジア留學生』)である。『東南アジア留學生』は昭和二十八年に開始された本学の給費留學生制度により来日した留學生に対する教育を巡る様々な内容が記録されたものである。発行日は昭和三十三年(一九五七)四月一日であり、近畿大学留學生運営委員会により発行されたものである。また、不倒館にて所蔵が確認され、『国際交流研

究』創刊号(近畿大学国際交流室、一九八五)にも同内容が収録されている。

まず、『東南アジア留學生』の内容構成は次の通りである。

一 解 縷

留學生招致についての本学の目的、留學生いよいよ到着する留學生の待遇条件

二 最初の蹉跌

事件の発端、事件の真相、大学側の腐心、留學生に関し識者に訴う総長の心意気

三 現 況

留學生運営委員会と留學生教育の基本方針、見学旅行と実習協力を得た諸団体へ感謝す、関西留學生協会設立の提唱と経緯、本学留學生の卒業並に在校生の名簿、東南アジ



『東南アジア留學生の招致と其の展望』表紙